

Sはある日強盗をした。いや、「した」というのは不正確だろう。「する羽目になった」というのが一番本質に近いと思われる。しかし、それも完全に正確だとは言えない。その二つの「した」と「する羽目になった」状態の丁度中間ぐらいの状況にSがあつたというだけにすぎない。

その日、山手線の外回りの最終の三本前からSは下りた。恵比寿ガーデンスクエアに向かう長い古いような明るいような恵比寿スカイウォークには誰もいなかった。女とS以外には。

Sが女を意識した時には強盗などは考えていなかった。そもそも脅すような道具はそれなりの運動でそれなりに鍛えられた体ぐらいたつた。それも最近では中年というくりに入ってからは衰えていた。

恵比寿スカイウォークには動く歩道がある。Sは山手線に乗る時は小説を読むことにしていた。あと何ページかで一区切りがつくというときには、その歩く舗道に立ち止まって読んでいた。

その日もそうだった。ある社会派小説家の駅前の書店で三か月前に買った新潮文庫の三十刷版百六十二ページ。物語が展開する状況で本を閉じるのははなはだ気色が悪く、あと三ページほどで一段落つくだろうと思ひ、ゆつくりと進んでいく歩く舗道の手すりにもたれながら読んでいた。

後ろから女が歩きスマホをしながら歩く舗道を不覚で来る。歩く必要もないけれど後ろに死神がいるかのよう

ようでもあり、七十年代の合体ロボのようでもあり、確かに人間の歩き方でもあつた。

女の腕がSに触れた。Sは全くぶつからないと思つていたため、その一撃に文庫本が落ちた。女は謝罪もせず

に会釈らしく五度ほど首を傾けただけだった。しかし、目はスマホの虫の好かないような人物が笑っている画面のみ見ていた。Sは文庫本を拾つた。が、昔から本を銃のように持つていたことを思い出してしまった。

スマホが嫌いなわけでも、歩きスマホが嫌いな訳でもなかつたけれど、Sの外部分りぎりぎりまで憤怒を希釈したかのような感情が久しく噴出した。

文庫本は人差し指と親指で表紙と背面を挟み、中指で小口を支えると拳銃のように見える。ハードカバーは右手で背の下半分を左手で背の上半分を持ち小脇に抱える

とマシンガンのように見える。意味もなく右手の親指と人差し指で文庫本を挟み、中指で支え、女に天を向けた。Sはインターネットの画像検索でしかみたことのない『タクシー・ドライバー』のあの鏡の前のシーンを意識していた。対象物はなかつたが。

直後、ずしりという感触、鉄の重さがSの手首にひつかつた。Sは左手で右手を抑えた。銃という凶器の力、「ぼつ」と人の命なんぞ消せるような力に畏怖していた。Sにはそれ以上に銃口を女に向けていたという事実がどうしても恐ろしく、また歓喜だった。歓喜というよりも権利を再認識したという現代社会的な実感としてSには感じられた。

宝くじに当たり、金を手に入れることが当然であるかのように、本という拳銃によって何をしてよいということが保証されたようであつた。

しかし、同時に義務としてSは使わなくてはいけないという強迫にさらされて、汗が出た。

高度経済成長期のガビガビの映像に映った白黒の、しかしカラフルでどこか羊水を思わせるような粘性の工場排水や幼子が虫を潰した時のみ出る薄緑色の体液を出すように。最近の子供はどうなのだろうか。巢に水を流し込み、ガ行の音をたててもがく蟻たちを喰うのだろうか。芋虫を潰してそのような緑色の体液を染み出させる残酷かつ不合理で不条理で、人間的な行為をするのかSは心配になった。

Sはこの汗を人間の分泌液として自分が分泌したことの本能的に知った。人類の中でSのみがこの権利と義務を持つてしまったという事実がそこにありありとあった。拭う暇もない。

Sは女を追いかけた。銃を背中に突き付け、「金を出せ」と白黒の駅馬車強盗の映画のセリフが出た。S自身も笑つてしまふほどだった。

ふと、Sは小説家に、誰であったか、檀一夫か、ベケツトか、安部公房か、星新一か、アシモフかにこういう話があった気がした。社会を風刺し、人間性の欠如を風刺し、ブラックな結末に落とし込む良い作品が。しかし、彼らはいくまでもスマホやインターネットのない時代の人々で、社会の背景が違うことに気が付いた。

もはや、自分の社会に対する不安感というものを彼らに書いてもらえることはないということや女の背骨に銃を当てた瞬間に実感した。その怒り、何者かへの反駁が女の背に伝染したようにSに感じられた。

パソコンのバグを伝えるウインドウが開くときの「ぐわん」という音がした。一度、女性の同僚がオーバードローさせた時に聞いた、あの現代の義務として貸与され

たパソコンに異常が発生したという音。現代人を社会から疎外するための音。原始人ならば獣に襲われている時に焚火が掻き消える時の「ずわ」という小さな音を聞いた時と同じ感触。

その音と同時に女が振り返った。人ではなかった。工場の人工知能搭載の溶接のアームが次の工程に移る時の直角の動きで女の首が曲がった。

女の顔はブルースクリーンになっていた。1と7と#とgと!と。プログラミングはなかったが、社会への反駁に対する報復として記号たちはそこに映し出された。

Sは「ひゃ」とおののいた。「ひゃ」というよりは肺の空気が反射的に排出されたに過ぎなかった。Sはこの現状の恐怖に人間ではなく、動物として存在することしかできなかった。

Sの引き金を置いた指に動物的に力が入った。どこに根拠があるが、いつに根拠があるがそれを映し出す機械を破壊するための力みが指にこもった。暴発した。

銃の三ページ目の「街へ出た。」の「へ」が女の脊椎に似たパイプをぶち抜いた。「へ」がひしゃげて地面に転がった音がした。

二人を乗せてゆつくりと確実に動く歩道が進んでいた。血は出ることもなく、女のショートの火花がB級のスプラッター映画のトマトのような血のように飛ぶ。女の顔は動力源を失ってシャットダウンしていた。リボルバーには九万二千三発残っていた。銃だけは取り出せるようにスーツの大きなポケットに入れた。

Sは歩く舗道を走った。家へ帰るルートを外れ、渋谷の方へ逃げるために走った。

自宅という社会的な居場所にいることは、特に社会への反抗を認めることになる。殺人罪は適用されない。そ

れよりも機構としての社会に対する責務を負わされるということがSには恐ろしかった。

Sはこの銃と負債を負つて社会の弾圧から逃げるしかないという事にモヤイ像のあたりで気が付いた。

その時、スマホに電話がかかった。聞きなれた電話のシロフオンの音が死刑の通達のような暗さを持つて流れた。

Sはこうなることを身構えていた。反抗した社会は全体的に人工知能を核として動いている。人間の管理なんぞは既に始まっているから、デジタルに足を突っ込んだ自分はすぐに社会に逆賊と判断されるということを自覚していた。

Sは歩きながら電話に出た。生物学的な性が全く感じ取ることができない特殊な声をしていった。もともと備わっていない様にも聞こえた。社会の規範としてそういった物は不必要であるかのように、レットルを拒絶している声色だった。それがSにはとても艶めかしく聞こえた。

「二〇二三年六月三日月曜日 S、H工業株式会社、四十歳、東京都渋谷区住民登録百七十二万八千十二番、国民健康保険番号・Q4422、パスポート番号・m64030277、以下略、反逆」

電話はそれで切れた。と同時に、周りの若者の目が全て監視カメラのレンズや顔認証システムのいけ好かないセンサーになっていた。人間に顔をのぞかれている時の好奇の目と観察に徹底したそれ以上のものを撮ろうとはしないカメラの目を内蔵していた。Sは頭痛が酷かった時にレントゲン写真の自身の脳を医者と一緒にまじまじと見ている時を思い出した。

この写真の脳はレントゲン線の影にすぎないけれど、今まさにこの脳が自分の頭蓋骨の中でゆつたりと思考し

ていると思考していることを思考している。脳をパイプがぶち抜いたけれど生きていた人の記事を思い出して気持ち悪くなったことがあった。

今この思考している脳がぶち抜かれたら。思考は中断するのか。どこかに人格が吹っ飛んで、新しい人格が出てくるのだろうか。意識はどうなるのだろうか。自分自身でいられるのか。

そういう奇妙な意識の感覚をSは思い出した。Sは監視カメラたちに脳髓の髄のさくつとしたような部分まで見られたような気がした。

そういった感覚の氾濫に襲われてSは嘔吐中枢が刺激され吐いた。今朝食べたトーストが「麦」という字になって吐き出される。「≡」と「夕」が吐瀉物特有のぐにぐにした粘性でハチ公の銅像の前の心地よく汚れた地面に落ちた。

それを目たちは録画していた。飛び降りに、雷に、人身事故に、地震に、火事に、洪水に、交通事故に、噴火に、強盗に目を向け続ける。報道と好奇として。

Sは酸っぱい嘔吐の残り香を鼻に感じながら、この目たちから逃げる方法を考えていた。逃げることをささげれば目たちは興味を失うことを知っていた。

若い部下の趣味が数週間ごとに変わっていく。大層なロードバイクを買ってすぐに売り、直後に好きでもない人気アニメのギターを買う。ミーハーというより時流に洗脳されているような恐怖を感じた。

社会に反抗したからといって時流に洗脳されている目たちは過激に反応して、すぐに興味は消えてしまう。そこで、Sは逃げることをなるべく同じ人に観察されないことを最優先に考えていた。

Sはいっそのこと武器を調達するためにコンビニに入ろうと思った。109の横にコンビニがあることを思い出し、道玄坂を登っていくが想像しているよりも勾配がきつくなっているように感じられた。

歩行者を見ると皆が歩きスマホをしながら他者を気にする余裕がない。しかし、正面衝突するとスマホを中心になめくじのように体をぐねりと振って、通り過ぎていく。勾配なんぞもつての他だろう。足首が捻挫した時の無理のある一瞬の角度を保ちながら、ぎりぎりと言を立てながら坂を当然に登っている。道玄坂が壁のようになっただけでも気が付かないだろうとSは感じた。

Sはコンビニにたどり着いた。光が目にも痛く感じられた。店員は愛想が良いが、目はカメラだった。テンプレートとの挨拶をしながら、同時に反逆者様いらっしやいませ、と言った。Sはブラウン管テレビだった時代にテレビの音声が重なる放送事故を見た時を思い出した。

傘と鉄とマンガ雑誌とパンなどを集め、好きな乳酸菌飲料を取ろうとした。すると、飲み物の棚からスナイパーライフルの胸が茸のように伸びて出てきた。

奥を見るとウイキペディアで見たステレオタイプなシモ・ヘイヘが居た。ただ、あの白い服にコンビニのマークがついていた。チェーン契約なのだろうと思った。Sはとっさにマンガ雑誌を盾にした。すると、シモ・ヘイヘのライフルが力んで、青空のような音をしてBB弾が射出される。マンガ雑誌の中央のキャラクターの笑顔がクレイターのように凹んだ。

ポケットの銃を飲料棚へ撃った。「私」と「ぬ」と。「人」が飲料に当たって紫の、黄色の、透明の色が噴き出す。タイルが鼠色に濡れていく。シモ・ヘイヘが緑色のエナジードリンクの缶を投げつけてきた。

Sは気力をつける時はコーヒーストを使っていた。しかし、会社の部下はドロドロした海ほたるのようなエナジードリンクを飲んでた。実際は粘性などないのだからうがそう感じられた。飲み込む時に喉が光っていたようにも感じられた。陰謀論のようなことを考えるようになったものな。社会に反抗しすぎた人間は猜疑的になるものなだろうか。と自問自答した。

そのことに気を取られていると、エナジードリンクの缶が細かく震えだした。アニメの爆発物のような動きをして、火薬の多すぎたねずみ花火のように駆け回って破裂した。

また、マンガ雑誌を盾にすると今度は雑誌の表面がたれた。他の客に液体がかかったが特に何も起こらなかった。普通に服が濡れただけだった。社会の範囲内にいる人間には関係のないことなのだろうとSは思った。自分自身も、このシモ・ヘイヘもはや渋谷という街の変な人の一部として見えているのだろうと。

シモ・ヘイヘが構え直した。Sは銃を乱雑に撃った。肉が吹き飛ぶ。破片が吹き飛ぶ。その肉が雑誌コーナーのグラビアアイドルの笑顔にぬたりとくっついた。

シモ・ヘイヘの内部からシリアルコードの書かれたシールが剥がれて出てきた。五年保証だった。シモ・ヘイヘの肉片がついたコーヒーストを、無糖のものを取る。買い物かごに流れ弾に当たってボロボロになった客の体液が溜まっていた。それを取る。にちちとガムを剥がすような粘性を感じながら取った。それにコーヒーストを入れてレジに持って行った。

店員に買い物かごを渡すと、店員も銃を持っていた。早撃ちは自分が勝つたとSは思ったがよく見るとスキヤ

ナーだった。眉間のあたりを撃ち抜かれた店員は特に何も言わずにスキャンと袋詰めをした。ポバという音をした後頭部の貫通銃創から薄いピンク色のような綿あめが垂れている。SNSに映えるということが喧伝されている色つきの綿あめだった。

金額を言う時になって音声の記憶機関のメモリーが吹き飛んでいることに気が付いたらしく自壊した。丁度金額を出して、Sはレシートはいらないということ言っただけで店を出た。振り返るとその店員が子音のみを連呼して煙を出していた。他のシフトの店員がバックヤードの食材廃棄用のごみ箱にその店員をぶち込んでいたのが見えた。

九万九千八百八十六発残っている。Sは自分が敵というか、そういったものに対して特に躊躇なく撃てるようになっていくことに気が付いた。

渋谷駅まで下りていく。時々、道玄坂を西部劇の転がる草、雑字の番組とかSNSの情報で知った「タンブルウイード」のように丸まったパンフレットが歩きスマホの人々と疲れ切ったどこから現れたサラリーマンを巻き込んでいく。「幸せ値を上げよう」「億の人はこうやっている!」「値上げは韓国のせい」「野菜・チョコあります」「ビーガン・フェミニスト以外はクソ」「高収入、#バイト募集」「原子力反対」「政府の陰謀について」

突き飛ばされ、組み込まれた彼らは半笑いだった。Sは青ガエルのいない交差点前広場を広く感じた。先ほどはカメラに気を取られて気が付かなかったが、青ガエルが景色にいないということが大きかった。

ハチ公の周りの石のベンチに座ってベーコンとチーズのパンとコーヒーをゆつくりと食べた。いつもは油のジヤンキーな味だったが、今日のSにとっては砂と布の味

だった。社会からはみ出した人間にはそういうジャンキーな、社会によって作られた自然でない食べ物は成り立たないのだろうと思った。

もうすぐ始発が出る時間になり、駅のシャッターが開いた。地面から規範的な恰好をした初老のサラリーマンが湧いて、駅に入ってゆく。一人だけネクタイの傾いた若いサラリーマンが湧くときに詰まった。目のクマが深すぎて眼神経がむき出しになっていた。どうにか地面から抜け出すと、泥のような光るエナジードリンクを飲みながら、改札に突っ込んでいった。その直後にはこりまみれになっているスピーカーから走ることを禁止する声

が流れた。音質が悪かったが、以前の電話の声だった。その声と相反するように先に歩いていった初老の男の声が早く来るように催促した。

その若いサラリーマンは改札に勢いをつけながらICカードをタッチした。しかし、その若者はゲートにはじかれて賽の目状にバラバラになった。

彼は全くバラになったことに気が付かないのか、ぴくぴくとその百円ショップのサイコロの塊のような全体を蠢動させながら進もうとしている。

駅員が吸い殻やペットボトルや落ち葉の入った、緑色の錆びてペンキのはげかかったちりとりを持ってきた。灰色のほうきで彼を掃き始めた。

腰がちりとりで掃きこまれた。下部から内臓らしきものがバラバラと出た。詳しく見るとその赤黒い一部が鼓動している。しかし、血は出なかった。血もまとまって塊にされてしまったのだろうかSは思った。

それでは崩壊せずに角切りの状態を保っているためモザイクのタイルのように渋谷駅の改札の前に散らばった。Sはその一部を拾った。駅員は掃き続け、若者は片

されてしまった。その一部が声を出した。「すみません。遅延証明書くださいませんか。」

Sはとっさに一部を地面に投げ捨てたが、またホームに向かおうと六面体は転がっていった。これからどうすべきなのかを同じベンチに戻って考えていた。もはや、電車に乗る気にはならなかった。そこにカメラを持った男が話しかけてきた。軽率な印象を全身にむき出して、ブランドものばかりを着ていた。動画投稿サイトでよく見る顔だった。目はカメラではなかったが、左目がないと思うとカメラが右の手のひらの皮膚と癒着してそこに左目が引っ付いている。しかし、まばたきはしていなかった。

Sは観察されるということを改めて意識した。素人の監視カメラなどは異なる、皮膚をひっくり返されて思想を撮られるようなその純粋なまでのカメラに嫌悪感を抱いた。

彼が何を言っているのかはSにはわからなかった。しかし、嘲りの音素が口から紫色に射出されていた。周りの人々、カメラの奥に見える人々がそれらを吸収するとゾンビ漫画の歪んだ顔に、潜在的に不安を感じさせるような不気味な笑顔にぐちゃぐちゃと変化していく。その笑顔の口からステレオタイプな不気味な笑い声が出ていた。

Sは銃を取り出し、変化したそれらに向けた。カメラの若者はまた音素を出し続けている。渋谷の人々が変化していくと夕立のようにざわざわと笑い声が大規模になっ

っていく。社会の機構の外から見れば扇動とはこういうことなのだろうとSは感じた。とにかくこれをやめさせなくては、と漠然と感じた。まだ直接的でない社会の弾圧が本格化

するかもしれないという不安を抱いた。引き金がコルク抜きのように一瞬の硬直の後、すばんと軽く動いた。

目の前の変化したOLがぬかるみを踏んだ時の下品な濁音まみれの音を出しながら、眉間に「降下する」「下」が開けた銃創から緑色の血を垂らしながら後ろに倒れた。周りの変化した人々は高音と低音を交互に叫びながらスマートフォンを片手にSを撮りながら未だに取り巻いていた。男はいつの間にも居なくなっていた。

Sは銃を乱射した。人々がスマホを手持ったまま倒れていく。しかし、誰も警察も救急車も呼ぼうとしない。

遠くから「衛生兵！こ」という声が粉々に聞こえてくる。いつの間にもスクランブル交差点には塵埃がはられ、遠くに軍用テントが見えた。変化した人々がナチスのハーケンクロイツやどこかの過激派が使っていたマークのヘルメットを読み込ませてAIに作らせたような凶案をプリントしたゲバのヘルメットをかぶって突っ込んで来る。変化したJKたちがピンク色とマンゴー色のハンディフォンのピンを抜いて投げつけてくる。狙いが外れたらしく味方に爆風が直撃した。奥から「めんごー」という声が聞こえた。

その変化した人々はシンセサイザーの声で何者かに向けて礼賛をしながら、いつの間にも埋まっていた地雷や流れ弾やSの乱射する銃につんのめり、床に落としたブラモのようにバラバラになり倒れた。Sは途中で寝てしまった戦争映画のラストシーンを思い出した。

男はいつの間にか大盛堂書店の看板の上に陣取って玉座の上に甲冑を着てカメラを全体に向けて構えながらカチンコを持って、何かを叫んでいる。Sは銃を彼に向けて撃った。

彼は撃たれ、バランスを崩して玉座ごと地面に墜落し

た。左手のカメラが折れ曲がって目が白濁していた。Sが近づくと、悪罵らしき錆びた蝶番の音を流し始めた。折れたカメラからマトリックスの数字のようなものが流れ出た。その数字はABCスローに入ったふにやふにやの崩れかけた文字のようでもあり、FXの値の冷酷な数字のようにも似ていた。彼はそれに気が付くと右目が幼児のようになった。それからだくと流れ続ける数字を右手で受け止めてすすり始めたが、出る量の方が多いらしく身体が灰色になっていった。餓鬼草紙のようだった。

五分ほど経つと彼はうつぶせに倒れた。いつの間にか凱旋パレードが始まっていた。鯉節のような剥がれた皮膚が紙吹雪になり、突撃ラップを持ちながら体を吹き飛ばされた男の右腕だけがファンファーレを鳴らした。

変化した人々の死骸を踏みつぶしてバニーガールやカウボーイの恰好の人々を乗せた車を通る。塵埃から頭を出した死骸をプルトマトをつぶすように。全く今まで戦場だったにもかかわらず、負傷兵たちもクラッカーを持って騒いでいた。Sにすら気が付かないようなほどであった。Sは銃をポケットにしまつて他の人に溶け込むように騒いだ。

八万五千二百一発残っている。フリーガンと化しそうな群衆の中を抜け、じりじりと改札に向かっていく。

となりのチンピラらしき男にSの腕が当たった。すぐさま、胸ぐらをつかまれ、許す代わりに強盗をするようにということを見た。男が喋るたびに、子供がわっか状になったスナック菓子を指にはめたようなレベルで大量にはめた金色の指輪が金属音を出す。

八万五千二百一発残っている。交通系ICカード奪い、渋谷駅に入った。コンコースが十二指腸のように人々を

通していく。蠢きつつ、胎動しつつ、たまに見入った人間を喰っている「明日の神話」が見えてきた。

それに向かって黒いペンキを塗りつけようとしている女がいた。古いセロテープのような色の写真の軍人の玉砕の鉢巻のようなものをつけていた。それには「石油を使うな」ということが書かれていた。

「明日の神話」の下のわずかな隙間にはいつの間にかテレビの泉に塗料を入れる人々やモナ・リザに卵をぶつける抽象画がかけられていた。女はペンキ缶ごと「明日の神話」に投げつけた。その瞬間、下の絵画がゴム風船のように膨張し、「明日の神話」を覆った。黒のペンキが中指を立てた指の形に広がった。

直後、その指が張り裂けた。石油の血が流れ出た。しかし、「明日の神話」は一センチも汚れることなく、そこに鎮座していた。

石油の血にまみれた女は燃えた。コンコースを走っていくが消えることはなく、巨神兵のように頭蓋骨が流れ出た。呻きつつ倒れたが燃え続け、意識は残り続けているらしく、枝のような骨がペキペキと焚火の音を出している。それを使ってマシユマロを焼き始めている人々も現れた。

若いサラリーマンを掃除した駅員がモップを持って歩いてきた。焼けた塊にバケツで水をかけるとずべべべという音と共に茶色と赤色の中間の皮膚がゼリーのように剥がれる。そのうち、駅員がモップでその体を吸い取り、全て掃除してしまつた。

駅員がSに気が付いた。ごみ拾い用のトングを切符鉢のリズムで鳴らしながら近づいてくる。社会の概念としてそこに居た。自浄作用が働かないことを懸念して出現したのであるかとSは思った。

八万五千二百発残っている。が、眉間から血が流れても駅員はそこに立っていた。

「こちらでございませう。」

Sは体からあらゆる物事を抜かれたような感覚になって従って行って行った。もはや、銃は意味を成さず、腐りかけたキュウリになってしまった。手に滲出液が溢れ、不健全なほど綺麗な床へ垂れた。もはや利き手の全体が健全な細胞を模した膿になったようにSは感じた。

渋谷駅を左に、左に、左に、左に、斜め右に、手前左に、左に曲がり、誰もいないホームについた。

電光掲示板には「渋谷行き」の電車しかなかった。スピーカーから干し椎茸のようなアナウンスが流れたが、風化して砂塵と化した。電車が入り、無音でドアが開いた。駅員はいつの間にか看守の服になり、入るように催促した。その扉の中は胎内のようなだった。

Sは食虫植物の前の蠅のようにゆれりと入った。発車ベルが脳幹の中で鳴った。[tee i a lwr hr s foe wti m hat lin yer] 分裂した音楽があたりを硬直させ、固定化した。乗ったことを感知したかのようにドアがジッパーになって閉まった。

「お客さん終点ですよ」

「あ、夢か。すぐ下りるよ」

鞆の中にはまだ、八万五千百九十九発残っていた。ただ、Sは社会のことを思い出したにすぎない。